

社会福祉法人永山会 令和2年度事業報告

1. 総括報告

(1) 法人本部

平成 29 年の社会福祉法改正の目的である経営組織のガバナンス(法人経営、法人の管理体制)の強化については、定款に定められた理事会、評議員会の開催、運営状況や財務諸表の公表、社会福祉充実残額の算定等、社会福祉事業の担い手として制度改革に基づき適正な法人運営を目指してきた。今後もサービスの質の向上や事業運営の透明化に継続して取り組む。

法人会計については月 1 回の公認会計士と施設管理者、担当職員との勉強会や会計チェックで管理者や実務者のスキルアップを目指している。また、経営会議では業績だけではなく、利用者に満足していただける質の高いサービスの在り方などを検討し安定した施設運営に努めた。

令和 2 年度は新型コロナウィルスの流行で、年度当初の事業計画のいくつかは取り組むことが困難になった。しかしながら感染症の流行で社会情勢が少なからず変化し、雇用に対する考え方や、働き方、会合や研修会の在り方などが多様化した。重点課題であった「職員の定着、雇用促進、人材育成」については新型コロナウィルスが流行したため外国人労働者雇用の検討は見送ることになったが、コロナが蔓延したことで飲食業のみならず、業種や職種によっては派遣切りが行われ、不安定なアルバイトや派遣での就労より、安定した正規職員での雇用を希望する傾向がみられ、人材紹介会社やハローワークを介して、介護職 10 名の入職があった。また、職員の定着の取り組みとして、働き方改革を推進し職員の個々の事情に応じて多様な働き方を選択できるように就業規則を見直した。人材育成についても、感染症の拡大で研修会や勉強会を活発に行うことはできなかつたがキャリアパスに基づき中堅職員を昇格し、役職を付けたことで仕事へのモチベーションが高まっている。

コロナ禍で、施設ではご家族の面会を自粛していただき、ご利用者やご家族とのコミュニケーション不足を解消するためにオンラインでの面会や、機会があるたびに施設内でのご様子を写真に収め郵送することでご家族へのアプローチを続けた。この企画はご家族の満足度も高く、職員との間にも新たな信頼関係が構築できた。

リスク管理については、大規模災害に備えた訓練や備蓄の整備とともに、令和 2 年度は感染症対策に重点を置き、衛生用品に不足がないように備蓄し、全職員が施設内の消毒はもとより日々の行動を自粛し、永山会感染管理マニュアルに基づき施設内での感染症予防に努めた。

(2) 施設整備・備品購入

設備名・購入品名	日付	部署	費用
加圧給水ポンプ更新工事	令和 2 年 10 月	そせい苑	1,004,365 円
乗用車 (ダイハツ: ミライース)	令和 3 年 3 月	そせい苑	1,169,610 円
受水槽	令和 2 年 4 月	しがそせい苑	8,500,000 円
横引き網戸交換工事	令和 2 年 12 月	しがそせい苑	960,000 円
ケアハウスのエアコン	令和 3 年 1 月	しがそせい苑	10,000,000 円
特養エアコン室外機修繕工事	令和 3 年 2 月	しがそせい苑	528,000 円
乗用車 (トヨタ: ルーミー)	令和 3 年 2 月	しがそせい苑	1,624,200 円
乗用車 (ホンダ: ステップワゴン)	令和 3 年 3 月	本部	2,927,190 円

2. 法人役員、評議員、評議員選任・解任委員

(1) 役員・評議員・評議員選任・解任委員 ※令和 3 年 4 月 1 日現在

役職	定数	氏 名
理事	6	津田知宏(理事長)、津田節子、前野芳子 山元安子、津田宏尚、宮川哲子
評議員	7	橋本長平、木村研志、堀出亀與嗣 池上喜之、吉澤英樹、鍵和田良学、山本光男
監事	2	山内幸雄、原田哲夫
評議員選任・解任委員	3	岸田光彦、山内幸雄、千代宜彦

3. 理事会開催状況

		開催日	内容
理事会	第1回	令和2年5月30日	1. 令和元年度事業報告(案)について 2. 令和元年度決算報告(案)について 3. 社会福祉充実残額(案)について 4. 借入金任意繰り上げ返済について 5. 評議員会開催について 6. 報告事項
	第2回	令和2年11月29日	1. 就業規則変更について 2. 令和2年度上半期事業報告について 3. しがせい苑エアコン更新について 4. 報告事項
	第3回	令和3年3月28日	1. 就業規則の変更について 2. 令和2年度補正予算（案）について 3. 令和3年度事業計画（案）について 4. 施設長選任について 5. 評議員選任・解任委員の改選について 6. 報告事項

4. 評議員会開催状況

		開催日	内容
評議員会	定時 評議員会	令和2年6月14日	1. 令和元年度事業報告(案)について 2. 令和元年度決算報告(案)について 3. 社会福祉充実残額(案)について 4. 借入金任意繰り上げ返済について

5. 第三者委員 ※令和3年3月31日現在

施設名	人数	氏名
そせい苑・まどか・まどかII	2	吉澤秀樹・寺田次輝
しがせい苑	4	鍵和田良学・山本光男・齋藤恵・岩澤千眞理

6. 第三者委員開催状況 ※令和3年3月31日現在

滋賀

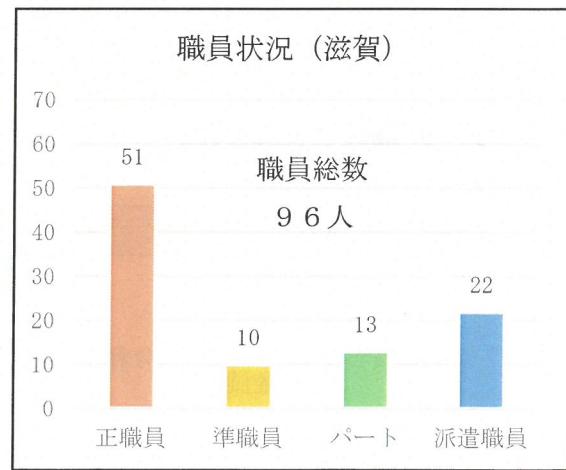
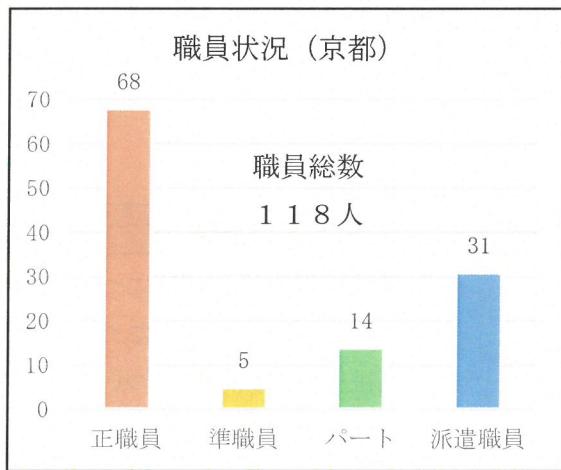
開催日	内容
令和2年4月15日	1. 令和元年12月～令和2年3月までの苦情、要望・意見 2. 利用者頭部裂傷事故について
令和2年8月19日	1. 令和2年4月～令和2年7月までの苦情、要望・意見
令和2年12月16日	1. 令和2年8月～令和2年11月までの苦情、要望・意見

7. 法人借入償還金状況 ※令和3年3月31日現在

借入先	当初借入額	償還済額	当期減	借入残額	償還期限	施設名
独立行政 法人福祉 医療機構	350,000	332,500	17,500	17,500	2021.11.10	しがそせい苑
	350,000	135,604	19,344	214,396	2032.4.10	まどか
	200,000	14,879	11,052	185,121	2037.12.10	まどかⅡ番館

単位：千円

8. 職員状況 ※令和3年3月31日現在



9. 派遣人件費・人件費率

	総人件費（円）	派遣人件費（円）	派遣人件費率
京都	484,741,722	132,954,365	27%
滋賀	343,643,984	69,140,883	20%

10. 人材紹介料

京都

事業所	紹介料（円）	職種／人数
特別養護老人ホームそせい苑	1,474,439	介護職：2名
そせい苑老人デイサービス	1,483,185	介護職・機能訓練指導員：各1名
地域包括支援センター	1,024,201	社会福祉士・介護支援専門員：各1名
そせい苑ケアプランセンター	747,912	介護支援専門員：1名
介護老人福祉施設まどか	499,999	介護職：1名
まどかⅡ番館特別養護老人ホーム	933,035	介護職・管理栄養士：各1名
まどかⅡ番館グループホーム	440,000	介護職：1名
まどかⅡ番館デイサービス	2,053,495	介護職・相談員 機能訓練指導員・送迎運転士：各1名
京都合計	9,464,032	15人

滋賀

事業所	紹介料（円）	職種／人数
特別養護老人ホームしがそせい苑	2,167,968	介護職：3名
滋賀合計	2,167,968	3人

11. サービス事業所活動報告

(特別養護老人ホームそせい苑・ショートステイ)

① 重点目標・最終評価

令和2年度の事業計画の重点課題として、看取り介護に取り組み1年間に12名のご利用者を見送った。看取り介護の回数を重ねるごとに気づいたことを記録に残せるようになり、ご利用者の情報を多職種で共有し最後までその人らしく過ごして頂くことができた。

新人職員の指導育成に関しては、ケアマニュアルに応じたOJT等や業務分担表を軸にした指導を実践することで、職員全員が標準的な介護の提供と業務を遂行することができた。

年度内に受診を予定していた第三者評価はコロナのため延期（令和3年4月16日受診）となつたが、今後も継続してサービス向上アンケートや介護サービスの評価を受け、高品質のサービスが提供できるように努める。

(ショートステイ)

前年度稼働率68.3%を大きく超え97.3%で終える事ができた。他事業所のケアマネージャーと密に連絡を取り合う事で、情報共有ができご利用者、ご家族に安心を提供できたことが稼働率の向上につながった。施設等への入所が決まれば稼働率が著しく低下するので、今後はショートステイでご利用者がどのように過ごすのかレクリエーションやリハビリ等目的を明確にし、居宅介護支援事業所に働きかけ、新規利用者の獲得を増やしていく。

(そせい苑老人デイサービスセンター)

① 重点目標・最終評価

定期的な訪問活動が満足に出来ず、パンフレット送付や電話連絡・FAXでの空所案内を行う事でしかできなかつた事や個別性の高いレクリエーションの実施ができず、新規利用に繋がる件数は少なく稼働率を上げる事ができなかつた。

機能訓練では自宅での過ごし方やデイサービス利用中の過ごし方について情報を収集し、出来る限り在宅生活が継続できるようなリハビリを個別や少集団で実施するようになり、意欲的にリハビリに取り組む利用者の数が増えた。

令和3年度はデイサービスでの目的を明確にし、定期的な訪問活動を通して居宅介護支援事業所との顔の見える関係を築き、新規利用者の獲得に努めていく。

人件費については、4月から介護職員を特養へ異動、派遣職員を正職員に切り替え、職員配置の見直しを行つた。また、新規加算として令和3年6月からADL等維持加算を算定し収入増を目指す。

(そせい苑ケアプランセンター)

① 重点目標・最終評価

8月より4名体制となり新規獲得を進めたが、給付管理数が伸び悩み、年間平均稼働率が88%に留まってしまった。管理者が主任介護支援専門員の資格を取得した事により、令和3年2月から特定事業所加算の算定ができるようになった。

「医療」との連携については、新型コロナウイルスの影響により、厚生労働省や行政から訪問自粛要請が出たが、主治医との「顔の見える関係性」作りの部分では感染予防対策を徹底し、可能な限りカンファレンスに参加するよう努めた。

報告・連絡・相談の体制作りや災害時などを含めた担当者不在時のフォローアップ制作りやワーク・ライフ・バランス確保のための計画的な有給消化や週1回以上の情報共有会議を開催し、よりタイムリーな情報共有に努めた。今後は病院の連携室との関係を構築し、新規利用者の獲得に努める。



(下鳥羽地域包括支援センター)

① 重点目標・最終評価

新型コロナウイルスの流行により当初の計画である地域住民との交流や地域の課題に対する支援が十分に行えなかった。新型コロナウイルス感染の到来により、職員を含め厳重な感染対策の下、地域へも三密を避ける、手洗いの徹底と消毒、2mの距離をおくなどの感染予防対策を呼び掛け地域におけるクラスターの発生を予防する事ができた。その代償として、三密を避けるが故に居場所での交流の機会が激減し、例年のように行ってきた地域のイベントの度重なる中止・感染への過度な不安から、高齢者の引きこもり・フレイルの悪化・認知症の進行を予防するといった包括の責務である「介護予防」に暗い影を落とすケースも見られたが、介護予防についてはオンライン方式での会議を導入、地域の高齢者については本所の保健師等専門職部会を中心に介護予防のための小冊子を作成した。

また特殊詐欺については社会福祉士を中心に周知と普及啓発に努め、居宅介護支援事業所からの認知症ケースでは主任介護支援専門員も介入し、包括全体のケース共有と会議を行う事で連携を図った。今後は①介護予防②虐待の背景③認知症の動向など、我々が直面する問題のデーター収集と整理・分析を行い、分析結果を地域や関係機関に投げかけ、エビデンスに基づいた活動を展開できるよう努める。



(介護老人福祉施設まどか)

① 重点目標・最終評価

まどか特養はコロナウイルス流行で感染予防の強化として、ご利用者には朝夕のバイタル測定の実施や職員には出勤時の検温と体調確認シートの記入を毎日行った。また、職員の休憩場所に関しても時間と場所が重ならないように分けることで感染拡大を予防した。

機能訓練指導員が入職したことにより入居者の機能訓練が充実し、立位時間や歩行距離が向上したことにより入居者の笑顔が多くみられるようになった。

稼働率は年間平均 95.1%であり、4月と9月に転倒で骨折や肺炎による入院者が増加したことで稼働率が低下した。今後は防げる入院を増やせるように福祉用具などを活用し予防することで95%以上の稼働率を維持する。

クラブ活動についてはコロナウイルスの感染予防の観点から入居者が集まるのを避け、ソーシャルディスタンスを保つために規模縮小や少人数制などの実施を余儀なくされた。また、地域の活動として、月に1回開催していたまどかサロンや近隣の小学校行事の参加はコロナウイルスの流行により、自粛をせざるを得なかった。今後は感染予防に努めながらクラブ活動や地域活動を徐々に再開していく。

職員の教育に関して、施設内研修はソーシャルディスタンスを確保し、フェイスガードとマスク着用で実施することが出来たが外部研修の参加に関してはオンラインでの参加が主流になりつつあるが中止になる研修も多く、キャリアパスに沿って参加ができなかつた。今後はオンラインでの参加を積極的に行っていく。

(短期入所生活介護まどか)

① 重点目標・最終評価

まどかショートステイはコロナウイルス流行で4月から6月は緊急事態宣言が発令され、利用を予定していた利用者からキャンセルが続き、稼働率が60%台と低迷したが緊急事態宣言解除後の7月からは80%以上の稼働率に回復し、年間では84.1%の稼働率となり、目標稼働率には0.9%届かなかつたが昨年の稼働率よりも9.7%向上した。

余暇に関してはコロナウイルスの感染防止の観点から昼食をご利用者と一緒に作り食べるハッピータイムと称したレクリエーションではご利用者が作る工程を中止し、管理栄養士や職員が感染対策を実施し提供する形に変更し継続した。また、昼食前のラジオ体操や下肢体操もソーシャルディスタンスを確保しながら継続した。今後も感染対策を継続しながらご利用者が楽しめる企画を実施していく。

新規利用者の獲得に向けて、空室状況を週に2回ファックスで他の居宅介護支援事業所に行い、感染予防対策への取り組みのチラシを作成し、他事業所へ配布した。

ご家族との連携に関してはご家族がどのような情報が必要か事前に聞き取りを行うことで退所時にご利用中の様子などが分かる情報提供票にご利用中の様子と知りたい様子をお伝えすることが出来た。

職員教育に関しては外部研修への参加が消極的であったため、今後はオンラインでの参加を積極的に行う。

(まどかⅡ番館特別養護老人ホーム)

① 重点目標・最終評価

令和2年度は、コロナ禍で入院すれば家族と面会できず、施設職員も見に行けないなど、ご入居者の状態確認が難しくなることを予想し、嘱託医・看護師と協力し日常の健康状態をよく観察して、早期に発見・対応を行い施設でも安心して過ごしていただけるようにした。

その結果、入院者数はのべ16名（令和元年度19名）となった。また、入院者に対してはリハビリの状況や食事の様子を病院の相談員やご家族とこまめに連絡を取ることで情報収集し、早期の退院が実現、入院日数は240日（令和元年度252日）となった。

サービスの向上に関しては、ユニットリーダーが主となり、他の職員を巻き込みながら施設内の清潔保持や消毒作業、ご入居者が楽しむことができる企画と運営ができるようになってきている。また、雇用形態や職種に関係なく職員が参加している「まどかⅡ番館全体会議」の開催により職員が意見を言いやすい環境づくりに努め、正職員の退職者はゼロとなった。

新型コロナウイルスによる影響で、地域の役員に施設の状況を広く知ってもらっている運営推進会議（2ヵ月に1回開催）は、令和3年3月開催分以外は書面での開催となつたが、神社の催事や地域の行事には声をかけていたなど、地域の福祉拠点としての関係性が継続されていることを実感できる結果となった。

(まどかⅡ番館グループホーム)

① 重点目標・最終評価

職員全員で「ご入居者の健康管理」「ADLの維持・向上」「かかりつけ医との連携」に取り組み、結果として入院者や退所者を出すことなく、年間の平均稼働率も100%を達成した。

年度当初に計画していた、地域行事への参加などが難しくなり、ご入居者に対してグループホームの中でできることを確実に実施していく内容に方針転換した。毎日午前と午後の2回に分けて体操やレクリエーションを日課とし、その成果を評価するために3ヶ月ごと（5、8、11、2月）の体力測定を継続して実施し、骨折などの重大な事故の予防、日々の健康管理に役立つことができた。

また、年度の当初からご入居者全員のかかりつけ医と顔合わせを行い、顔の見える関係づくりに努めた。結果として、コロナ禍におけるオンライン受診など、これまでと違ったかたちでの受診でもスムーズにやりとり（連携・情報共有）をすることができた。

(まどかⅡ番館デイサービスセンター)

① 重点目標・最終評価

デイサービスで過ごす時間を利用者一人一人の要望に沿うような過ごし方やレクリエーションに取り組み、稼働率は毎月向上し令和3年3月の稼働率は58.5%（令和2年4月から25%増加）となったが、稼働率目標を達成することができなかった。

年間を通して、パンフレットや空き情報を居宅介護支援事業所へ送付、ケアマネージャーからの問い合わせには即日対応することで、信頼度の向上、デイサービスの見える化に努めた。また、お試し利用に来られたご利用者の様子を担当ケアマネージャーへ即日FAXを行うことで、定期的にご利用いただける結果（お試し利用23名、新規利用18名）となった。

また昨年度から継続して、サービス全般の業務の見直しを行い、まどかⅡ番館デイサービスで過ごす時間をどのように充実させるかを職員が一丸となって考えることができるようにになった。業務整理についても、職員一人一人の動きを時間軸で細かく設定し、ムダのない動きに努めた。

リハビリについては機能訓練指導員の持病による退職以降、機能訓練に係る加算請求はできなかったが、法人の各施設の機能訓練指導員がバックアップすることにより、ご利用者のリハビリは継続することができた。

(特別養護老人ホームしがそせい苑)

① 重点目標・最終評価

利用者一人一人の生活課題や意向に沿って、ケアプランや24時間シートを作成し、施設での生活の中で本人の思いを尊重できるよう支援してきた。嗜好や希望を考慮し、リハビリ体操やクラブ活動に参加し、ADLの維持向上がみられた。ケアプランについては、定期的にサービス担当者会議で内容を協議し、変更しながら生活支援に繋げることができた。

24時間シートについては、内容更新や新規入所者への作成の遅れが見られ、速やかに更新、作成することが今後の課題に挙げられる。前年度は転倒や骨折の事故が起こっていることをふまえ、業務の標準化や介護マニュアルに沿った介護を職員全員行えるようにするために新規職員の育成については、入職時にマニュアルを手渡し、育成担当者はマニュアルに添った指導を行うよう努めた。

看取りについて今年度は9人で昨年同様、看取りを終えたあとは「蓮の会」を開催し、看取りの振り返りと他職種で共有することができた。

コロナ禍で面会が制限される中、ビデオ通話を使用してご利用者の様子を伝えるよう努めた他、毎月の日々の様子を伝えられるよう各ユニットでお便りを作成し、ご家族に安心していただけるよう情報発信にも努めた。

(ショートステイ しがそせい苑)

① 重点目標・最終評価

利用者一人ひとりの評価、普段の様子等をケアマネージャーや家族等利用者をとりまく事業者と情報交換し少しづつではあるが在宅支援ができた。今後、ケアマネージャーとの情報交換が全ての利用者にできるよう、アセスメントやモニタリングを詳細に行っていきたい。

重度の認知症の利用者が多くなる中、認知症研修へ参加した職員を中心に一昨年度から認知症に対する勉強や関わり方などの勉強をユニット会議等で行い情報共有し取組みを行い認知症利用者に対する職員の意識も変わり、その場だけでなく継続的な援助ができ、また認知症の利用者を緊急で受け入れ対応することができた。

令和2年度も稼働率や現場目標を定め、安定した稼働率を確保できるように努力してきたが、4月～6月にかけてコロナがまん延し、新規利用者数が減少したことが響き11月頃まで稼働率が低迷した。しかし9月頃から徐々に新規利用者が増加し、その後定着していったため、12月頃から稼働率が向上し2月・3月は目標稼働率を達成することができた。

年間の新規利用者数は令和元年度57名、令和2年度は73名であった。また今まで関わりがなかった事業所からも新規の依頼をいただけたことは定期的に訪問活動を行ってきた成果だと思われる。次年度も引き続き新規利用者とリピーターの獲得につなげ、目標稼働率達成を目指していきたい。

(デイサービス しがそせい苑)

① 重点目標・最終評価

今年度は新型コロナウイルスが流行、緊急事態宣言が発令され、4月27日～5月末まで短縮営業を行った。緊急事態宣言解除後より最少人数で感染予防を行い、三密を避けて季節の花を見に外出したり、外食の代替としてデリバリーで普段あまり食べない物を持ち帰り施設内で食事を楽しむことができた。

また、デイ会議や通所計画会議で多職種が共同で機能訓練のプラン内容を見直した。機能訓練指導員が3ヶ月毎に行う自宅訪問のアセスメント内容をもとに、在宅生活の継続に必要な内容を提案することができた。レンタルしている3種類の器具を使った運動はもちろん、日常生活の繋がる排泄動作訓練や移乗動作訓練等の提案、パーゴルフなど楽しみの中で行う訓練の提案を行った。居宅支援事業所への訪問活動を毎月継続して行い、居宅ケアマネージャーとの関係性の構築やデイサービスの取り組みのアピールをすることで、下半期は新規相談件数や体験利用者数が増えた。

しかしながら、デイサービスでの活動がマンネリ化しているところもあるので、来年度も引き続き訪問活動を行い、新規利用の獲得に努めていく。

(居宅介護支援事業所 しがそせい苑)

① 重点目標・最終評価

要介護状態となっても住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを続ける事ができるように、地域のつながりが継続できるよう心掛けた。ご近所同士が朝夕、声を掛け合う環境にあるので、地域での見守りを大切にし、民生委員や健康福祉委員による定期訪問を地域の重要な社会資源として活用できるように位置づけた。守山、野洲医師会発行の在宅療養手帳を活用し、病院、介護サービス、ケアマネが情報を共有できるように活用し、必要であれば担当者会議に出席してもらうよう努めた。認知症に対する理解が不十分なため、閉鎖的で家族以外の人に援助を求める認知症の方やその家族に対して地域包括担当者と定期的に訪問し、状態の把握や困りごとを聞き、必要な支援に繋がるように努めてきた。

感染症対策を講じたものの明富サロンを再開することができなかつた。コロナ禍で利用者をどう支援していくかが課題である。地域ケア会議に参加し、個別課題の解決の糸口を探ると共にケアマネジメントの実践力を高めるよう自己研鑽に努めていきたい。地域での『介護者の集い』が開催されなかつた為、冊子を作成し地域の在宅介護者に配布を行つたが、身近なケアマネージャーとして、いつでも相談できる環境づくりに対しては不十分であつたと思う。コロナ禍を理由に、地域に対して積極的な働きかけができなかつたことが目標稼働率を達成できなかつた要因と考える。

(ケアハウス しがそせい苑)

① 重点目標・最終評価

体力測定は入居者全員を対象とし、年3回実施した。その数値の変化を「見える化」し、自分の体力の変化を知ることで健康意識を高めてもらう。また体重の増減や血圧値の変化を早期に発見することで、個々の入居者の体調変化に気づくことができた。

ケアハウスでのレクレーションとして『大人の塗り絵』『書道』『脳トレ』に参加し、楽しみながら脳を活性化し、できるだけ長く健康でケアハウスで生活できるよう、介護予防の推進、入居者の機能向上に努めた。

介護事業関係者にケアハウスの存在や利点を知ってもらえるように各介護支援事業所や病院の地域連携室への定期的な訪問活動を行つた結果、100%を維持することができた。

新型コロナウイルス感染予防のため、手洗い・うがい・消毒の徹底や外出の自粛、3密回避を呼びかけると共に、食事席の整備、換気など日常的な予防対策を行つた。

